沖縄タイムス　2002年（平成14年）12月28日　土曜日

環境に優しい観光へ（下）

総括　エコツーリズム国際大会

開　梨香

ホスピタリティー評価

沖縄の魅力焼き付ける

【イベントとしての大会成果と課題】

今大会は沖縄発で企画・運営された国際大会である。

日本エコツーリズム協会の全面的な支援とアジア生産性機構、国際協力事業団、ニュージーランド政府による海外ゲストの旅費負担、日本旅行業協会、全国旅行業協会、地球環境基金など、県外各団体の協賛・助成により、二十四カ国が参加する国際色豊かな大会となった。

会議そのものが充実した内容を評価されたのは、テーマ・人選を三回のプログラム委員会で練り上げ、各パネリストに具体的なリクエストを出した成果といえる。

すべての会議資料は日英二カ国語に翻訳、参加者に配布した。質疑では質問用紙を集約、実質的で、建設的な質疑応答となるよう努めたことが内容の深化につながった。

二つ目の評価はホスピタリティーだった。

本大会では食事、移動、交流、ツアーから休憩時間まで沖縄らしいもてなしにこだわり、自然・文化・人とのふれあいの機会をつくった。

県外参加者をキャンデーレイで迎え、大会感謝状は手染めの紅型に、感謝の言葉をウチナーグチで印刷した月桃紙のカードを添えた。もちろん、紅型に関する解説入りである。

滞在中に使えるよう大会オリジナルポストカードを用意、首里城を刺しゅうした色紙をおみやげにした。招請者の宿泊ホテルでは、アロマセラピーのマッサージで疲れを癒やしてもらった。

また、会期中の休憩時間にはいつでもソフトドリンクとクッキーを提供した。ほとんどは県内企業に協賛してもらったが、これらはすべて地域らしさを生かすエコツーリズムの実践である。

亜熱帯の自然と多様な文化を持つ沖縄県は、これまで東京や京都しか知らなかった海外参加者に、日本とは違う魅力で焼きついたようだ。

基調講演のデビット・アンダーセン氏をはじめ、国際的に活躍しているパネリストからも「トップクラスの大会だった」と称賛の声が相次いだ。

三番目の評価はスムーズな運営だ。プロジェクトチームとして組織した大会事務局に、国際会議を経験したスタッフはほとんどいない。

だが、全員が主体的に役割と責任を自覚して取り組み、チームワークのとれたベストチームとなった。三カ月間のそれぞれの成長は目覚ましく、仕事を通じた人材育成の重要性をあらためて実感した。

さて、今後の問題はこれらの成果をいかに生かすかだ。

大会ホームページではディスカッション内容を含め、大会にかかわるすべての情報を日英二カ国語で、順次公開したいと思っている。大会の成果の継続発信と双方向通信、そして、参加者ネットワークの今後の活用など、ITの活用と推進を図る上でも予算集めとともに工夫を要する。

また、最も重要なことは、会議の成果をエコツーリズム推進のための政策に反映させることだ。

今大会は本年度から始まったエコツーリズム推進事業と連携している。各コンベンションの成果を沖縄の振興に生かすためにも、まずはエコツーリズムでの実践が求められている。

最後に、大会に協賛した沖縄電力をはじめ県内企業各社にあらためて感謝したい。大会は県観光リゾート局の下に実行委員会を設置、県事業の一環として取り組んだことが成功の誘引となった。このような官民一体となった企画・提案型コンベンションが、今後さらに活発になることを期待したい。

（日本エコツーリズム協会理事）

沖縄タイムス　2002年（平成14年）12月27日　金曜日

環境に優しい観光へ（上）

総括　エコツーリズム国際大会

開　梨香

地域許容量の設定を

資源活用型から共存型へ

〝環境に優しい観光〟を目指した「エコツーリズム国際大会・沖縄」が十一月二十八日から四日間、沖縄コンベンションセンターで開かれた。世界二十四カ国から五百五十九人が参加、各種会議で活発な論議が展開され、多くの成果を挙げた。協力と支援をいただいた方々への感謝を込め、本大会を総括したい。

【エコツーリズム推進における成果と課題】

今大会はこれまでのエコツーリズム会議から一歩踏み込んだ実践的な会議を狙った。

「自立」を前面に打ち出し、「経済振興」と「多様性・独自性の維持」の、二つの流れに沿って絞り込んだ、六つのテーマで分科会を展開。県民の申し込みはキャンセル待ちが出るほどで、大会中も多くの参加者が最後まで熱心に聞き入った。

その中では各地域・分野で問題意識を持って取り組んでいる参加者の思いも随所に感じられた。

特に、二日目のフィールド視察では、国頭村、東村、大宜味村、名護市の八コースに海外参加者三十九人を含む二百人が参加、それぞれの特色を生かしたプログラムや昼食を楽しんだ。

また、夜の交流会では地域を挙げたもてなしに国籍や職業を問わず、参加者の歓声が上がった。

訪れた人・受け入れた人、それぞれが楽しみ感動する。エコツアーのだいご味でもある。

一方、会議では地域におけるマスタープランの必要性が幾度も示唆された。

地域らしい自然や文化を持続的に生かす観光の推進には、既存の総合計画では対応できない。県内でも地域ごとに、より具体的、実践的なマスタープランを早急に策定する必要がある。

地域ごとのキャリングキャパシティー（環境許容量）を設定し、ガイドラインを策定する必要性もあらためて浮き彫りになった。

さらに、島しょ地域における観光収入の島外流出を抑え、島内でお金を循環させるシステムの必要性についても、再三議論された。これらは、エコツーリズムの推進のみならず、沖縄観光全体にとっても重要な課題である。いかに地域還元を図り、地元の観光収入を高めるか、その仕組みづくりが求められている。

ところで、各セッションでは大規模リゾート計画など、西表の事例が話題となった。エコツーリズムを推進する過程で、どこでも起こる問題がすべて集積されていることからすると、西表はまさしく先進地といえる。

エコツーリズムの実践は課題の連続である。それをどう解決していくのかである。三日目の沖縄特別プログラムでは、行政と実践者三百人近くが一堂に会し、本音で議論したが、これによって現状認識と相互理解のためのきっかけができたように思う。

大会で共通認識となった各セクター間の役割分担を明確にし、パートナーシップを図ること。それには、まず課題を共有し、折り合いをつけながら、より良い解決策を見いだし、実践し続けることである。

最後の総括で、JTBの舩山龍二会長は「旅行会社の社員にとってエコツーリズムはもはや教養である」と言いきった。

マスツーリズムの中にも地域の自然・文化環境や生活への尊重と配慮、触れ合いを深めるというエコツーリズムの要素を取り入れていく必要性が認識された。資源活用型から資源共存型へという沖縄観光への提言も意義深い。

エコツーリズムは実践である。机上論・理想論で推進しようとすると、うまくいかない。本大会を機に各地域・各分野で活動が活発になることを期待したい。

（日本エコツーリズム協会理事）